

# 源氏物語への回路

——伊勢物語第六段の再検討から——

山 本 登 朗

- 一 問題の所在
- 二 新しい考察へ
- 三 人称のゆらぎ
- 四 仮名消息から
- 五 融合と独立
- 六 消息・日記から源氏物語へ
- 七 伊勢物語の場合
- 八 源氏物語への回路

源氏物語に見られる、前後に連接形式を持たない和歌挿入という表現形式が、伊勢物語にも見られることに再度注目し、近年土方洋一氏によつて画賛的和歌と名付けられたこれらの表現について、最近の陣野英則氏の論、早く昭和三十四年に提唱された阪倉篤義氏の論、仮名消息に注目した池田和臣氏の論などを手がかりに、新しい考察を試みる。特に、和歌と地の文の融合と、前後に連接形式を持たない和歌挿入という二つの形が、共通の地盤の上に成立し、新しい物語叙述の方法としてともに源氏物語に用いられたものであることを確認して、そこに至るまでの回路の中に伊勢物語を位置づける可能性を考える。

## 一 問題の所在

芥川の段としてよく知られている伊勢物語第六段については、これまででもくり返し検討を重ねてきたが、今回は源氏物語との関わりをも視野に入れながら、あらためて考察を試みたい。ひとまず次にその全文を掲げておく。(以下、伊勢物語本文は宮内庁書陵部蔵の冷泉為和筆天福本により、表記などを適宜改める。)

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先多く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓やなぐひを負ひて戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」と言ひけれど、神鳴るさわざに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率てこし女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆと答へて消えなましものを

これは、二条後の、いとこの女御の御もとに、仕うつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていたりけるを、御兄堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

冒頭から「白玉か」の和歌までの、いわゆる「物語部」では、男に「盗み」出された女が、「芥川といふ川」のほとりの「あばらなる倉」で「鬼」に食われてしまう話が語られ、その末尾には「白玉か」の歌が記されている。登場する男女の名は記されておらず、場所は都から離れた摂津国三島郡の芥川のあたりとなっている。都びとたちの日常から離れた場所で起こった、素性も不明な人物にまつわる、しかも女が鬼に「一口に」食われてしまうという、非現実的伝承とでも言うべき内容が、ここでは語られているのである。

それに対して、「これは」以降の、いわゆる「段末注記」の内容は大きく異なっている。ここでは「物語部」の登場人物が、実は「二条后(藤原高子)」「堀河の大臣(藤原基経)」「太郎国経の大納言(藤原国経)」といった、歴史上

實在の人物であつたとされ、それぞれの身分にふさわしい敬語も用いられている。しかも彼等は、読者によく知られている人物として通称によつて紹介され、場所も都を離れた芥川ではなく、実は内裏の中でのできごとであつたとされる。すなわち段末注記の解釈によれば、前半の物語部で語られている話は、実は、後に二条后と呼ばれることとなる藤原高子が「ただにおはしける時」、すなわち皇太子に入内する以前に、都の貴族たちにとつて身近な場所で実際に起こつた事件だつたということになる。

このような段末注記の性格やその役割、また意味するところについては、すでに「伊勢物語と毛詩―段末注記という方法―」（『国語国文』平成二五年八月）で論じたので、詳細をここでは繰り返さないが、他にも第三段や第五段などに見られるこの種の注記は、物語創作のひとつの方法として意図的に加えられたと考えられること、また、特にこの第六段の段末注記は、この章段が伊勢物語の一段として加えられたその当初から、ほぼこのような形で存在していたと考えられることだけを、あらためて確認しておきたい。他の章段と比べて段末注記が格段に長大であり、しかも前半の物語部の内容と段末注記の内容が前述のようにきわめてかけ離れているこの第六段は、他に類例を見ない大胆な方法によつて作り出された、きわめて冒険的な作品だつた

と考えられるのである。

このような第六段には、さらにもう一つ、伊勢物語中でも数少ない特異な表現が用いられていて注目される。『伊勢物語論 文体・主題・享受』（平成一三年・笠間書院）第一章三「伊勢物語における散文と和歌―連接形式の意味―」（初出は平成一一年）ですでに述べたように、この章段には「白玉か」という和歌だけがただ一首、物語部の末尾に記されているが、その直前の文章には「足ずりをして泣けどもかひなし」とあるだけで、次に和歌が来ることを予測させるような表現が、そこにはいっさい見られないのである。物語部はこの歌で終わり、その直後からは、まったく次元を異にする段末注記が始まるのであつて、「白玉か」の歌の後に、この和歌を受ける「〜とぞ詠みける」などといった表現が見られないことは言うまでもない。

前述の拙論は、井出至氏によつて書かれた先駆的論文「和歌散文連接形式の変遷」（『文学史研究』五号・昭和三十一年一二月、『遊文録・国語史篇一』〈平成七年・和泉書院〉に収録）を参照しながら論を進めているが、その井出氏が注目して論じている、「和歌の前文後文が地の文であつて、そこに、和歌を先行的に前触れしたり、又言外に仄めかしたり、後行的に指示したりすることのまったく含まれていない内容をもつた形式」、すなわち「連接形式の上

から、和歌が全く非引用文的な状態のまゝで表現されるという場合」が、この伊勢物語第六段の和歌散文連接についてもそのまま該当する。源氏物語およびそれ以降の作品に多出することが井出氏によってはじめて注目されたこの種の和歌散文連接の形は、実は伊勢物語にも、すでにこのように見られるのである。このような事例の存在を、源氏物語をも視野に入れながら、どのように考え、どのように位置づければよいのだろうか。また、その考察によって、伊勢物語について、どのようなことがらを明らかにすることができのだろうか。

ちなみに伊勢物語には、いま問題にしている第六段以外にも、同様の例が次のようにいくつか見られ、注目される。(該当和歌の前文の傍線部について、連接形式にかかわる異文を参考までに注記する。本文確認について、加藤洋介氏編『伊勢物語校異集成』(平成二八年・和泉書院)を参照した。)

#### 〔第九段〕

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白うふれり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとか鹿の子まだらに雪のふるらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重

ねあげたらむほとして、なりは塩尻のやうになむありける。

\*最福寺本「五月のつごもりに、雪いと白うふりけり。これを見て」

#### 〔第十三段〕

(前略)京より、女、

武蔵鑑さすがにかけて頼むには問はぬもつらし

問ふもうるさし

とあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

問へばいふ問はねば恨む武蔵鑑かかるをりにや人は死ぬらむ

\*刈谷図書館蔵為相識語武田本「とあるを見てなむ、たへがたき心地して」

\*最福寺本「とあるを見て、たへかねて」

#### 〔第二十一段〕

(前略)いといたう泣きて、いづかたに求めゆかむと門にいでて、と見かう見、見けれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、かへり入りて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだに契りてわれやすまひし

と言ひてながめをり。

人はいさ思ひやすらむ玉かつらおもかげにのみい

とど見えつつ

この女、いと久しくありて、(下略)

\* 伝飛鳥井雅俊筆本「と言ひてながめて」

\* 天理図書館蔵伝慈鎮筆本「と言ひてながめ

おりて」

\* 塗籠本―傍線部なし

## 〔第百十七段〕

昔、帝、住吉に行幸したまひけり。

われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよ経ぬらむ

おほむ神、げぎやうしたまひて、(下略)

\* 最福寺本「住吉に幸行し給しとき」

\* 神宮文庫本・阿波国文庫旧蔵本・谷森本

「住吉にみゆきしたまひけるによみてたてまつらせ給ける」

\* 泉州本「住吉に行幸したまひけるによみてたてまつりける」

\* 真名本「住吉行幸為給多利計流尔」

## 二 新しい考察へ

土方洋一氏は「源氏物語における画賛的和歌」(『むらさき』第三三輯・平成八年一二月、『源氏物語のテキスト生

成論』平成一二年・笠間書院)で、「作中人物の誰かの心中または発語であることが明示されておらず、前後の地の文の間にただ差し挟まれて浮かんできているように見える歌」に注目し、それを通常の独詠歌と区別して「画賛的和歌」と命名した。典型的な例として同論文の冒頭に掲げられた「桐壺」巻の一節を再引用しておく。

かの贈物御覧ぜさす。亡き人のすみか尋ね出でたりけん、しるしの釵かんざしならましかばと思ほすも、いとかひなし。

たづねゆくまほろしもがなつてにても魂たまのありかをそこと知るべく

絵に描かける楊貴妃のかたちは、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひ少なし。：

土方氏は同種の事例について、平成一八年に開かれた青山学院大学日本文学科主催の国際学術シンポジウム『源氏物語と和歌世界』で、「物語作中歌の位相」と題して、新たな視点を加えて報告し、その内容は、『国際学術シンポジウム 源氏物語と和歌世界』(同大学日本文学科編、新典社選書19・同年九月)に文章化されている。

土方氏が「画賛的和歌」と呼ぶこのような源氏物語作中歌は、前述した「和歌散文連接形式の変遷」で井出氏が指摘して注目した「和歌の前文後文が地の文であって、そこ

に、和歌を先行的に前触れしたり、又言外に仄めかしたり、後行的に指示したりすることのまったく含まれていない内容をもった形式」、すなわち「連接形式の上から、和歌が全く非引用文的な状態のまゝで表現されるという場合」と同じ連接の形を持つものであって、基本的に両者の論の対象は同じであると言つてよい。井出氏の論をふまえながら前述の拙論（初出は『説話論集 第九集』平成十一年・清文堂出版）をまとめた時点で私は土方氏の御論に触れる機会を持たず、その存在を知らなかった。前述のような井出氏や私の論考と土方氏の論考は、このように、互いにその存在を知ることなく進められたのである。

雑誌『国文学』（平成一九年四月）の「学界時評・中古」を担当していた私は、上記の「物語作中歌の位相」を紹介するにあたって、上述の事情を、「東西断絶の一例として、自戒をこめて」記し、「今後は幅広い交流のもとに、この重要な問題の検討がさらに進められることを望んでおきたい」と述べたが、時評では具体的な論述ができなかったのだ、後に「散文と和歌の連接——いわゆる「画賛的和歌」をめぐる——」（『むらさき』第五一輯・平成二六年）を書いて、この問題に関する私の見解を簡略に論じた。それに応えて、土方氏は『源氏物語』作中歌のひとつの形態——画賛的和歌をめぐる——」（『青山語文』四六号・平成二八年

三月）の中で、私の見解に対するご自身の考えを述べている。本稿では、それらをもふまえ、いま一度あらためてこの問題を捉え直してみたい。

### 三 人称のゆらぎ

陣野英則氏は、「ナラトロジーのこれからと『源氏物語』——人称をめぐる課題を中心に——」（『新時代への源氏学9・架橋する「文学」理論』竹林舎・平成二八年）の中で、土方氏の言う「画賛的和歌」を「主体が確定しがたい作中和歌」と呼んだうえで、それに関する土方氏と私の見解を取り上げて検討し、「両者ともに、和歌の前にその詠作者の一人称的な叙述がみられる、という基本のパターンをみているようである」と指摘した上で、源氏物語「橋姫」の実例の検討を通して、「しかし、それは必ずしも決まったパターンとまではいえないのではないか」と述べ、そのような源氏物語内の和歌のあり方が、この物語に特徴的な「人物の対象化のゆるさ」すなわち「人物が人物としてくつきりと客体化・対象化されていないこと」と深く関わっているのではないかと指摘し、考察を展開している。

はやく、阪倉篤義氏は「物語の文章——会話文による考察」（『文章と表現』第四節・角川書店・昭和五〇年、初出は昭和三四年）の中で、陣野氏が取り上げたことがらと類

似する問題について、「歌と地の文の融合」を考える視点から、次のように述べている。長い引用になるが、あえて該当部分をそのまま掲げておく。

『源氏物語』においてもまた、和歌は、はなはだ重要な位置をしめている。それは、やはり、ほとんどすべて会話文的に用いられているのであるが、注意されることは、「つくり物語」であるべきこの物語において、日記に見られたような、歌と地の文の融合という現象が、数多くみとめられるということである。しかも、ここにいたっては、単に前述のような、地の文から歌への融合のみならず、逆に、歌から地の文への融合という、あたらしい現象がおこっているのである。すなわち、たとえば、

月も入りぬ。

雲の上も涙にくるゝ秋の月いかで澄むらむ浅。

茅生の宿。

おぼしやりつゝ灯火をかゝげつくして……

において、「雲の上も」の歌は、帝の、いわば「独話」である。それがただちに、「おぼしおやりつゝ……」という地の文に連続する。こういう例は、この物語中になお数箇所、指摘することができるが、これは、さきに指摘した、地の文から歌への融合とはまた違った

意味を持つ事実であろうとおもわれる。すなわち、日記における、地の文から歌への融合というのは、本来、作者の一人称的な表現である地の文のムードのなかへ、作中人物として客観化されたはずの作者自身の詠嘆的な独話が、やはり自然にまぎこまれてしまうということである。それに対して、この、歌から地の文への融合というのは、たとえば帝という、作中に設定された第三人称的な人物の独話のムードに、第一人称的な地の文の叙述態度が合致していく、ということである。

こういうことがおこり得たのは、すなわち、日記においては、しばしば、作者の一人称的な立場が、せっかく一往、作者自身の客観化されたすがたとして第三人称的に作中に設定された人物を、食つてしまつて、全体を主観的な色あいでありつづしてしまふことが多かったのに対して、この物語では、むしろ逆に、作者自身が作中の第三人称的な人物の立場に立つて、ことがらを、その人物の一人称的な立場からながめ、記述しようとしているからである——と、いうことができる。純粹に三人称的にえがく「つくり物語」と、むしろ一人称的表現にかたむく「日記」との、総合として生まれてきた、一つの物語叙述の方法で、やはり、これは、あつたのである。



『源氏物語』におけるこのような叙述態度の表れは、いろいろな点において指摘できる。……（下略）

陣野氏の論と阪倉氏の論には、視点の異なった部分も含まれてはいるが、ともに人称のゆらぎを問題にしている両者の考察の基本的な部分には、共通するところが多い。ただし、最初にことわったように、阪倉氏の論は、「歌と地の文の融合」を考える視点から述べられていて、いま問題にしているような和歌と散文の連接の形については、阪倉氏はまったくふれていない。陣野氏が問題にしている「人称のゆらぎ」によってもたらされる現象としてまず想起されるのも、一般的にはやはり、会話文や心内語と地の文の融合、そして歌と地の文の融合であろう。人称のゆらぎの問題と、本論で問題にしているような和歌散文連接形態の問題の間には、まだ埋められなければならない、若干のへだたりがあるように思われる。以下、それについて考えを進めてゆきたい。

#### 四 仮名消息から

池田和臣氏は、「源氏物語の文体形成―仮名消息と仮名文の表記―」（『国語と国文学』平成一四年二月）の中で、源氏物語に見られるような歌と地の文の融合が、本来、日記や物語に挿入されている仮名消息の中に数多く見られる

ものであったことを指摘し、「源氏物語は、それをさらに推し進めて、物語に挿入された消息文の中のみでなく、物語の地の文と和歌との融合、会話や心内文との融合という文体を方法化したのである」と述べている。この論は、仮名消息の特性に着目した画期的な業績と言ってよいが、池田氏は仮名書状がそのような現象を示す理由として、「叙述の位相差を鉤括弧などの表示によって視覚化することがなくのつべりと連続していく、そういう仮名文の表記形式の特異さゆえに、歌と散文という叙述の位相差を意識せず自然に移行させることができたのである」と説明するが、ここで言われている「仮名文の表記形式の特異さ」は、特に仮名消息だけに限ったものではなく、すでに阪倉氏が、先に引いた『文章と表現』第四節の前引部に後続する部分でも注目しているように、土佐日記貫之自筆本の形態などから、広く日記的仮名文表記の特性として指摘されてきたことがらでもあった。それら仮名文一般と異なつた仮名書状の特性としては、表記形式の特異さに加えて、仮名書状の「散文」部も含めた全体が、一種の会話文ないしは心内語のように、一人称的性格がきわめて強い叙述となつていることに注目する必要があると思われる。すなわち、仮名書状においては、「散文」部も和歌も、すべてが共通した一人称モードで貫かれており、「散文」部と和歌



の融合が、他の種類の仮名文とくらべて、きわめて起こりやすい、ないしは意図的に起こしやすい環境にあったと考えられるのである。

連接形態を持たない物語内の和歌について考察している本論で、特にこのような、仮名消息における散文と和歌の融合に注目するのは、前後の散文中に連接形態を持たない和歌が、やはり同じように仮名消息文に多く見られるからである。旧論「伊勢物語における散文と和歌―連接形式の意味―」で指摘したように、手紙の中に和歌が挿入される場合は、前後の散文中に連接部がある例がむしろ少なく、次にあげる宇津保物語「くらびらき上」の一節のように、前後に何の連接部も持たない方が、むしろ自然な形であったと思われる。

：昔ながら侍らましかば、かく思ひたまへましやと思ひたまふるにつけても、心憂くこそ。

もろともに巢馴れしものをおのが世々にかかれる鶴とよそこに聞くかな

かへすがへすもねたくこそ。我が君、：（下略）

散文と和歌の融合と、前後の散文中に連接形態を持たない和歌、この二つの現象は、このように、ともに仮名消息に多出する点で共通する。いま一例をあげれば、蜻蛉日記の中巻、鳴滝の般若寺に籠もり続ける作者のもとを訪れて帰

って行った「なま親族だつ人」から手紙が届く。その文面について、日記はまず、

「帰りし空なかりしことの、はるかに木高き道を分け入りけむと見しままに、いとどいみじうなむ」など、よろづ書きて、

と一部を紹介した後、あらためて次のように、おそらくは手紙の末尾部と思われる文面をそのままの形で引用している。

「世の中の世の中ならば夏草のしげき山辺もたづねざらまし

ものを、かくておはしますを見たまへおきて、まかり帰ること、と思うたまへしには、目もみなくれまどひてなむ。あが君、深くものおぼし乱るべかめるかな。

世の中は思ひのほかになるたきの深き山路を誰知らせけむ」

など、すべてさし向かひたらむやうに、こまやかに書きたり。

ここに引用されている手紙の文面には二首の歌が含まれているが、一首目の「世の中の」の歌の末句「たづねざらまし」は、そのまま後続の散文部「ものを、かくて：」に連続する形で融合している。そして、二首目の「世の中は」の歌は、その前に和歌を予想させる連接部を持たず、

後文もなくそのまま手紙が終わっている。散文と和歌の融合と、前後の散文に接続形態を持たない和歌という二種類の手法が、このように同一の手紙のほぼ同一の部分に、隣り合うように用いられているのである。

## 五 融合と独立

このように、散文と和歌の融合と、散文部に接続形態を持たない和歌という二つの現象は、仮名消息に多出する点で共通するが、両者の関係は、以下に見るように、実はそれだけにとどまらない。旧論「伊勢物語における散文と和歌―接続形式の意味―」の最後の部分ですでに指摘したように、散文と和歌が融合している場合、そのほとんどの事例において、その和歌は、一方で、散文部に接続形態を持たない形で挿入されているのである。

前に引いた池田氏の論文に、消息文における和歌散文融合の一例としてあげられている例を、まず見ておきたい。蜻蛉日記の下巻、作者の養女に執拗に求婚する藤原遠度が、作者の冷淡な態度に困惑して帰って行った翌朝、作者は次のような手紙を遠度に送る。

いとあやにくに、松明とものたまはせで帰らせたまふ  
めりしは、たひらかにやと聞こえさせになむ。

ほととぎすまたとふべくも語らはで帰る山路のこ

ぐらかりけむ

こそいとほしう。

「ほととぎす」の歌の「またとふべくも語らはで帰る山路のこぐらかりけむ」という表現が、そのまま「こそいとほしう」に融合して連続していることは言うまでもないが、実はこの「ほととぎす」の歌の直前の散文部には、この歌を導くような接続部分はまったく見られない。これは一人称的な手紙文なので、この現象は、さきにも述べたようにきわめて自然な形と言つてよい。

もう一例、手紙の場合を見ておこう。さきに、手紙文における、前後に接続部を持たない和歌の例として掲げた、宇津保物語「くらびらき上」に見える手紙の一節を、あらためてもう一度示しておく。

：昔ながら侍らましかば、かく思ひたまへましやと思  
ひたまふるにつけても、心憂くこそ。

もろともに巢馴れしものをおのが世々にかかれる  
鶴とよそに聞くかな

かへすがへすもねたくこそ。我が君、：（下略）

「もろともに」の歌が接続部を持たないことは見れば明らかだが、歌の後に続く「かへすがへすもねたくこそ」という言葉の「かへすがへす」は掛詞であつて、親鳥が卵を「孵す<sup>かへ</sup>」つまり孵化させる意の「かへす」という意味を、

副詞の「かへすがへす」の裏の意味として併せ持っている。

（源氏物語「真木柱」に、「かへす」の自動詞形「かへる」が「巢」とともに用いられた「同じ巢にかへりし卵かひの見えぬかな……」という例も見える。）この場合は歌と後続文が文章の形として連続しているわけではないが、後続文のそのような表現は、あきらかに直前の歌の「もろともに巢馴れしものを」という部分に呼応しており、後続文もまた歌の一部のように述べられていることになる。この場合も歌と散文は広い意味において融合していると考えるべきであらう。

手紙文の場合、歌が接続部を持たないことはごく自然なことなので、このような、和歌散文融合との結合もそれほど問題にはならないが、同様の現象は、以下に見るように、源氏物語の地の文にも数多く見出すことができる。

これも池田氏があげられている例だが、源氏物語「御法」の例。

たへがたく悲しければ、人目にはさしも見えじとつづみて、「阿弥陀仏、阿弥陀仏」とひきたまふ数珠ずの数に紛らはしてぞ、涙の玉をばもて消ちたまひける。

いにしへの秋の夕の恋しきにいまはと見えしあけぐれの夢

ぞなごりさへうかりける。やむごとなき僧どもさぶら

はせたまひて、…

前文には接続部がなく、突然のように和歌が挿入されるが、後文には歌文融合の形で連続している。このような融合の形での連続は、散文が和歌引用を受けている後文接続の形とは言えない。「いにしへの」の歌と「ぞなごりさへうかりける」全体が一文となってひとまりの言語表現を作り上げているのであって、いわば、この全体が一首の和歌となっているのである。

もう一例、池田氏が和歌と後文だけを示しておられる源氏物語「少女」の例だが、これも前文をみると、接続部のない形になっている。

乳母たちなど近く臥してうちみじろくも苦しければ、かたみに音もせず。

さ夜中に友呼びわたる雁がねにうたて吹き添ふ萩のうは風

身にもしみけるかなと思ひつづけて、……

この場合は、「さ夜中に」の歌から「身にしみけるかな」まで全体が融合して「と思ひつづけて」の「と」が受ける内容を構成している。見方によっては、この「と思ひつづけて」が「さ夜中に」の歌の後文接続の役割をはたしていると言えなくもないが、その場合も、「と思ひつづけて」が受けている内容には、「さ夜中に」の歌だけでなく、「身

にしみけるかな」の部分も含まれていると考えなくてはならない。それはやはり、もはや和歌を受ける後文連接とはいえないであろう。

さらに一例、阪倉氏が「物語の文章―会話文による考察」の前引部に引用している源氏物語「桐壺」の例を再掲する。これも、阪倉氏は、歌文融合の例として示しておられるが、前文からの続き方は、連接部を持たず突然和歌が始まる典型的な形である。

月も入りぬ。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿

おぼしやりつつ灯火をかがげつくして……

このように、源氏物語には様々な例が見られ、多様な形でこの手法が使われている様子をうかがうことができるが、さらに、やや事情の異なった場合を検討しておきたい。池田氏が前掲論文の冒頭に引いている源氏物語「蓬生」の例である。

……昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、さめていとなごり悲しく思して、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかしこの御座ひきつくるはせなどしつ、例ならず世づきたまひて、

なき人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづ

くさへ添ふ

も心苦しきほどになむありける。

この場合は、前文の末尾に「例ならず世づきたまひて」とあるので、これが「なき人を」の歌を導く連接表現であるかのように見られもする。しかし、歌から後文への融合と連続を考えると、この和歌の前後は「例ならず世づきたまひて（涙を落としている）」のも心苦しきほどになむありける」と叙述されているのであって、「例ならず世づきたまひて」は「なき人を」の歌を導く連接表現ではないように思われる。異例の形ではあるが、この「なき人を」の歌も、直前に連接部を持たない歌と類似した形でここに挿入されているように思われるのである。

## 六 消息・日記から源氏物語へ

散文と和歌の融合と、散文部に連接形態を持たない和歌という二つの現象は、このように、両者が一体となった形で数多く見出される。これは、この両者が、同一の条件、同一の背景のもとで出現可能であったことを示しているように思われる。

この両者の併用は、池田氏が歌文融合について指摘されたように、当初は仮名消息で多く用いられていたと思われる。さきにも述べたように、散文部と和歌を連続して記す

書式を持つことの多い手紙の文章では、散文部も和歌もとに基本的に一人称で書かれていて、それが、一方で散文と和歌の融合を可能にし、もう一方で、連接形式を使わない和歌挿入をも自然なものにしていたと考えられるのである。

この二つの方法、中でも特に散文と和歌の融合は、源氏物語以前では、旧論でとりあげた特殊な場合を除けば、消息文以外にはほとんど見ることができない。確実な例としてわずかに指摘できるのは、旧論にもあげた、土佐日記の次の部分である。そして、この例はまた同時に、散文部に連接形態を持たない和歌が見られる、土佐日記中唯一の部分でもあった。ここでも、散文と和歌の融合と、散文部に連接形態を持たない和歌という二つの現象、というよりも方法は、一体となった形で用いられているのである。

…海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。七十路八十路は、海にあるものなりけり。

わが髪かみの雪と磯いそべの白波といづれまされり沖つ島

守

梶かぢ取言へ。

消息文ほど徹底した一人称ではないにしても、語り手が一人称的に自分のことを語ることが基本とする日記文学に、わずかながらでもこのような例が見えるのは、必ずしも不

思議なことではない。これに対して、連接形態を持たない和歌挿入という方法は、消息文でなくても、かなり多くの実例を見ることができる。まず、蜻蛉日記の中巻から一例を示しておく。

五日、なほ雨やまで、つれづれと、「思はぬ山に」とかやいふやうに、もののおぼゆるままに、尽きせぬものは涙なりけり。

降る雨のあしとも落つる涙かなこまかにものを思ひくだけば

また、旧論でも示したように、次のような、日記的な性格を持つ私家集には、かなり頻繁に類例が見られる。(次にあげる『増基法師集』は、『いほぬし』とも呼ばれ、その冒頭部は熊野への日記的紀行として知られている。)

〔書陵部蔵増基法師集・五〕

紀の国の吹上ふきあげの浜に泊まれる夜、月いとおもしろし。(中略) 心なき身にもあはれなることかぎりなし。

をとめ子が天の羽衣引き連れてむべもふけるの浦におるらむ

〔西本願寺本元真集・二〇五〕

忘れたる女の家にて雨宿りしてゐたるを、「今はここに」と言ひたり。

ふるさとは雲居のほかに飛ぶ雁をよそなる人の帰ると  
や見む

これらの詞書は、日記のような一人称性の強い文章で記されており、消息文と同じように、ごく自然に、連接部を介さずに和歌に続いていると考えられる。ところが源氏物語では、消息文だけでなく物語の地の文でも、これらの方法が数多く用いられていた。それは、阪倉氏が前掲論文の引用部の最後で述べていた、「純粹に三人称的にえがく「つくり物語」と、むしろ一人称的表現にかたむく「日記」との、総合として生まれてきた、一つの物語叙述の方法」によって生み出されたかたちであつたと考えられる。

陣野氏は前掲論文の中で、散文部に連接形態を持たない和歌挿入という方法にかかわる源氏物語の特性として土方氏が前掲「物語作中歌の位相」の中で述べている内容を、

「作中人物に焦点化し、語り手がその人物と半ば一体化しつつ」、「読み手にとつても自身の感慨として受け止めること」を可能にする「体験話法もしくは自由間接言説と呼ばれる話法」、あるいは「一人称として読みなされる言説」との接近により、物語が「ある種の内面性を獲得したこと」

とまとめているが、その内容は、阪倉氏の指摘と、重なり合うところが大きいように思われる。

## 七 伊勢物語の場合

旧論で私は、伊勢物語における和歌と散文の連接の形を、大きく三種類の原型にまとめ直して考えようと試みた。まず第一に、古今集の詞書のように、和歌の前文が「歌」などの名詞や「よめる」などの連体形による準体句で終わり、和歌の後に「と」のような引用の助詞が存在しない形、これはあきらかに、歌集の詞書を継承した連接形態である。次に、前文が「くして」などといった形で和歌を導き、和歌の後に「と」という助詞があつて和歌を受ける形。これは初期の作り物語が会話を引用するのと同じ一の連接形態である。定家本『伊勢物語』には、私の計数によれば、前者が五十四例、後者が四十三例見えるが、実はより多いのは、前文が詞書の形なのに和歌の後に助詞「と」が使われているなどといった、両者の中間形ともいふべき形である。

しかしながら、伊勢物語中の散文と和歌の連接中でもつとも注目されるのは、さきの二つのどちらでもなく、また中間形でもない、本論で問題にしている、連接部分を持たない第六段のような事例である。消息文に見られた歌文融合や連接部のない和歌挿入が、前述のような形で源氏物語に多く見られるように、伊勢物語にも、数例ではあるが、第六段のような事例が見られるのであつた。同様の形は、



大和物語や平中物語には、旧論でも確認したように、特殊な場合を除けば、まったく見られない。連接部分を持たない和歌挿入という形は、歌物語の中でも、伊勢物語にかぎって見出されるのである。

伊勢物語の原型が古今集以前にすでに作られていたことはいまやほぼ定説になっており、私も「在原業平と伊勢物語の始発」(『伊勢物語 虚構の成立』竹林舎・平成二〇年)で詳しく検討した結果同じ結論を得たが、逆に伊勢物語が、その後いつまで作り続けられて現在の姿に至ったのかということについては、実はいまだに確定的な議論がなされていない。第十一段に、十世紀半ばの人である橘忠幹の和歌が使われており、また第三十九段の段末注記に源順の名が記されているが、それらは、十世紀後半まで伊勢物語が増補改作され続けた痕跡を伝えているだけであって、その後どこまでその作業が続けられたかについては、容易に推定することができないのが現状である。源氏物語の「絵合」では伊勢物語が古い物語とされているが、さまざまな物語の改作が、平安時代を通じて盛んに行われていたことを考えれば、源氏物語の「絵合」に登場したその伊勢物語に、現在の章段がすべて含まれていたかどうかは不明と言わざるを得ない。

伊勢物語第六段がいつ成立したかも、もとより不明だが、

同じ二条后章段でも、原型が古今集よりもさかのぼると考えられる第四段、第五段、特に成立段階の途上で加えられたと見られる第五段の段末注記で、入内以前の二条后・藤原高子が身を寄せていた親代わりの保護者として伯母にあたる五条后・藤原順子が暗示されているのに対し、第六段では、いとこにあたる染殿后・藤原明子の名が示されているなど、その内容には異なった部分があり、第六段の方が、第四段、第五段とはやや間隔を置いて、より新しく作られた段であった可能性が大きいと考えられる。(第六段の「白玉か」の歌は、紀貫之が編集した『新撰和歌』に見えるが、作者も詠作事情も記されておらず、第六段との関係は明らかでない。)一方、土地の伝承を思わせる話を長大な段末注記によつてまったく別な話に読み替え、結果的に虚実のまじりあつた不思議な世界に読者を誘っているこの段の方法は、けつして素朴なものではなく、大胆に仕組まれた、斬新な試みだったように思われる。作風や文体はもとより大きく異なるが、伊勢物語のこのような章段と源氏物語が、それほど離れていない時期に、前後するように生み出された可能性も、決して皆無ではなかったように思われるのである。

## 八 源氏物語への回路

紫式部日記には、実家に一時帰宅していた際の述懐の一部として、次のような記述が記されている。

……はかなき物語などにつけてうち語らふ人、同じ心なるは、あはれに書きかはし、すこしけ遠き、便りどもを尋ねても言ひけるを、ただこれを様々にあへしらひ、そぞろごとにつれづれをば慰めつつ、世にあるべき人かずとは思はずながら、さしあたりて、恥づかし、いみじと思ひ知るかたばかり逃れたりしを、さも残ることなく思ひ知る身の憂さかな。試みに、物語をとりにて見れど、見しやうにもおぼえず、あさましく、あはれなりし人の語らひしあたりも、我をいかに面なく心浅きものと思ひ落とすらむとおしはかるに、それさへいと恥づかしく、えおとづれやらず。

ここには、出仕以前の紫式部が、「はかなき物語」を語りあう親疎さまざまな知人たちを持っていて、互いに文通し合い、それによって「恥づかし、いみじと思ひ知る」憂愁からさしあたって逃れることができていたこと、出仕後はそれさえもできず、かつての友人たちとのつながりも途絶えてしまったことが述べられている。ここで言われている「はかなき物語」を源氏物語と考える萩谷朴氏『紫式部

日記全注釈』（昭和四六年・角川書店）のような見方もあるが、他の多くの注釈が言うように、「同じ心なる」友人や「すこしけ遠き」文通の相手は、単に紫式部の書いた物語作品の読者・批評家であつただけでなく、自分たちもさまざまな物語を書く作者であつた可能性が大きいと考えるべきであろう。特に、紫式部がわざわざ縁故をたどつてまで文通を求めた「すこしけ遠き」相手は、物語の作者として紫式部の周辺にまで名前が聞こえていた、かなり著名な作者たちだつたのではないかと思われる。

彼女たちがさまざまに書き、それを送りあい批評しあつていた物語は、どのような文体で書かれていたのだろうか。一人が作り出した新しい趣向や叙述の文体は、すぐに新しいスタイルとして彼女たちに共有され、その中から、さらに新しいかたちが生まれ、そのスリリングな展開に心を奪われた紫式部は、言葉の冒険の中で「恥づかし、いみじと思ひ知るかた」を忘れることができたのではなかったか。源氏物語のような作品が、何もなしどころから突発的に生まれたと考えることはむづかしい。歌文融合や連接部のない和歌挿入を含め、新しい物語表現についてのさまざまな試行、さまざま盛り上がりがあつてこそ、その回路の中から、源氏物語は生まれることができたと思われるべきであろう。その回路の中に、伊勢物語の第六段などを位置づけ

ることはできないかと、ひそかに考えるのである。